



ふるおや みおう

有限会社竹橋経営コンサルティング代表取締役。日本政策金融公庫に10年在籍し、融資、審査、事業再生、債権管理など中小企業金融に関する幅広い業務を経験。その後、公益財団法人日本生産性本部を経て独立。著書に『借りない資金繰り』『融資業務変革の基点』等。

元銀行マンは語る

企	業	融	資	の
本	音	と	建	前



竹橋経営コンサルティング 代表

古尾谷 未央

## 第11回

# 愚痴をこぼして失うもの

## 金

融機関の職員は、日々多くの経営者と接しています。そのなかで、最も敬遠される社長はどのようなタイプでしょうか。一言でいうと、「無責任な経営者」です。

先日、ある自動車部品メーカーの下請け企業の社長を交えて、金融機関と話をする機会がありました。企業側から、大手メーカーからの発注が昨年を大幅に下回る状況にあり、予想以上の売上の落ち込みとなっていることを報告すると、金融機関は当然、この状況をよいものとは捉えませんでした。

逆境のときこそ

「態度」で示す

こうした状況で、金融機関が厳しい現状以上に気にするのは、経営者の「態度」や「現状への向かい方」です。金融機関は、経営者がどういった対策を講じようとしているかを常にみています。

厳しい現状を真摯に受け止め、現状打破に向けてやるべきことを考え実行できる社長は、他人のせいにするような発言はしません。取引先のせいにしたところで、何の解決にも繋がらないからです。そのため、「大手メーカーから

の発注が少なくなったから業績が悪化した」というような他責発言を繰り返す社長に対して、金融機関は前向きに支援しようとは考えません。

また、人件費の上昇について、社長はつい国の責任にしてしまいがちですが、金融機関は十分に対応できている取引先も多くみえるため、「対応できない会社Ⅱダメ」という厳しい見方をします。社長は自社や同業者のことだけしかみえていないことが多いのですが、金融機関は他業種で業績好調の企業にも多く融資していることを忘れてはなりません。

## 金融機関に

## 愚痴は厳禁

金融機関に対し、社長がつい愚痴を言いたくなる気持ちはよくわかります。しかし、その重責に對峙できてこそその経営者であり、その認識が弱い、または十分でない経営者に対して、金融機関は「信用を置けない」ひいては「お金を貸せない」という考え方をします。信用は一朝一夕にはつくれないものです。Credit(クレジットⅡ貸し)は、本来の意味の通り「信用」なのです。

また、経営者が愚痴をこぼすと、金融機関は表面上は同調するものの、本音のところは「この社長では自ら改善を図ることはできないだろう」と考えるのです。

一方、金融機関としても、そうした話を聞きながら、企業がどのようにしたら苦境を乗り切れる「お手伝いができるか」と、真剣に考えているのも事実です。そうとは知らず、さらに愚痴話を展開してしまう経営者は注意が必要です。金融機関が紹介できる販売先がないかと考えているなか、社長の愚痴がエスカレートすることがあれば、紹介先に迷惑を掛けてしまいかねないと考え、その気持ちも薄くなってしまいうからです。

他人に責任転嫁するようでは、経営者失格です。最後は金融機関も会社を守ってはくれません。自らの人生をかけて取り組んでいる事業は、最後は自分で守るしかないのです。そのため、よい時期こそ驕らず、謙虚に次の芽を育てるような取組みが大切になります。社長の発言から感じられる「責任感」こそが金融機関の評価につながり、「この企業を支援したい」という担当者の思いにつながるものなのです。